

## 『仏教と児童福祉』

国際児童年にあたり

児童への問いかけ

矢野 俊雄

去る五月に仏教大学仏教社会事業研究所署名の封書を受け取りました。さて何事なるやと不安と期待を以て開封してみました。研究所長恒川武敏先生名にて「本年は国際児童年の意義深い年でありますので、仏教と児童福祉」を特輯のテーマとして広く各方面からご意見を頂きたいと存じます。つきましてはご多忙中恐れ入りますが特に先生の玉稿を賜りたくお願い申し上げます。何卒趣旨ご賢察の上ご寄稿下さるようお願い致します」とありました。今迄にない大変な体験であるだけにどうしようよと迷いつづけたましたが、卒業以来今日迄ずっとお世話になっている本学のことを思い、恥さらしを覚悟の上筆をとってみようと考えた次第です。さてここで思い出す今日迄の私自身の状況を思い出して稿を進めて見たい

と思います。私事になって恐縮に存じますが、私は昭和二十八年に仏教大学として浄土学部を置き曇鸞教学をテーマとして藤堂恭俊先生の下に御指導を受け、第一回の卒業生となって居ります。在学中一時本学の社会事業研究部に入り、仏教を中心基調とした社会事業方面の研究に手をつけ、大へん興味を持ちのぼせているいろな所へ出廻り一人悦に入ったりした若い青春の思い出が懐かしく思い出される夢を持ったものです。今は臨済宗妙心寺派の管長になられた山田無文老師の後について行ったりして、あの瀬戸内海の長島の愛生園慰問に行ったのも今では青春の若い夢の一頁でもあります。各階層の凡ゆる人達に接する機会を得られたのも、夫々の人間皆生くる姿として「生命」の尊とさをひしひしと感得されたことは今でも私の身体の一部に残っていることはほんとうに有難いことだと感謝しています。勿論時代の様相は現在とは違い、物資不足の貧しい世相で食べることに毎日考える乍りの姿でありました。うどん玉に醬油をかけて食べるのが一番の御馳走で夢中に食べたのを今でも忘れるこ

とは出来ません。当時同じ学生でも年輪の差は大きくあり、大学教授より年令が上の学生が居ったりした程で、それはそれで大へん楽しい勉強でありました。終戦により今になって考えますことは私は不思議に人生の一つのカケにより生き残った現在の生命に妙なる縁を深く感じています。私の多くの友は当時、陸海軍に志願兵として進んで入り、若い生命を戦場に散らしておるからです。不思議に助かり、生き残った現実是不思議なる如来の本願力としてどうしてもいただかざるを得ません。儲けた生命として日々を見つめて居ります。私は一地方（北九州市）の無法松の一生として知られる小倉の師範学校（当時は福岡第二師範と言われた）を卒え、八幡東区の小学校に四ヶ年奉職いたし、苦しい時代の小学生に接している訳で今から考えれば夢我夢中で過してまいりました。いつも子供の姿は苦しい中でも何物にも左右されずに美しい真実の姿であるということは時代が変った今日でも離れることはありません。当時は教員の待遇が極めて悪く特別な眼を以て見られる風習で、水を呑んでも塩をなめても忍耐

して物に動ぜず、に減私奉公で生きて行くのが教育者であるという教学に対する一つの哲学がしみ込んでいたとも言え言えるようであつたと思います。こゝらあたりで考えてみますと、法然上人の凡夫の自覚に接触し、啓発されたような感じを持ったように思います。立派であつても実行出来なければ何にもならない、つまり生活の充足感が無ければなんにもならないという妙な哲理を以て教員の待遇の悪さに積極的な学問の追求を忘れがちになつたように思います。ひるがえつてみれば、若し今日のように教員、公務員の待遇が良ければそのまま、所謂仏教にも縁がうすく、今頃は何処かの小学校の教頭にでもなつてゐるのではなからうか。此のような時に大きな転機として母親の死に会うことになる。寺院後継として此の際思いきつて心機一転を期し、教員の道を離れたのであります。今では良かったかと思ひはしますが、結論は経過してゐなくては判らないと思います。私の先代のすゝめ九州大本山善導寺に三ヶ月入山し、当時の江藤徹英師（善導寺では御前様と呼称している）に三部経の素読を受け、

朝早い動行につき冷たい量での足の痛さをこらえ乍らの思い出は今でも懐かしいものである。善導寺では毎朝動行には必ず「広懺悔—敬白十方諸仏十二部経—」を誦誦します。其の中でよく出てくる「殺害一切三宝、師僧父母、六親眷属—」という言葉に意味はよく判らないが、何か身のひきしまる思いに緊張したことが忘れられない。世の中ということは判らないこと乍りである。又世の中が判るという人は実は誰一人も居らないのではなからうか。そのような気持ちをたえず私は身体の何処かに持つてゐるようです。判らないが身のひきしまる思い、それが即ち仏教ではなからうかと考えざるを得ない。よく君は江藤徹英師の弟子かと京都では言われるが、別に師弟という深い縁でも何でもありませんが、三ヶ月程一緒に身体これ接触のご縁をいただいたに過ぎません。今から考えてみれば何も知りませんでした。以前浄土宗教学部長として偉いご前様であつたと聞いて吃驚したことです。江藤ご前が熱を帯びて説法なさると、まことに熱漢漢、パッパツとツバが頭にふりかまかり物い形相になられるのも現代に

は又とない昔の形のご前様の姿でありまよう。それこそ、説法中に如来前（長崎県の或る寺の）に憤死なされたことを聞き、色々と批判なされる方は多くあつたように思います。私にとってはまさに殉死し立派な説法の唯一の師であると自負してゐます。仏教に一つの開眼の機を与えていた、仏教の一端—これぞまさしく生命の尊重ということでありましよう—に生きた眼を開かせていただいたのが善導寺の三ヶ月であつたと思います。師は大へん子供さん達にやさしい一面を持つていたことは知られざる一面でありましよう。衣の中にはたえず、グリコ、キャラメル、ビスケット等入れて居り、信者の子供に見ればすぐ手に握らせる姿は今以て強烈な印象の教化と言えろと思います。先ず与えるチャンス—これからの時代を背負つて立つ子供を捉える技術をそのまま見習つた感じ。私は自坊では信者の方が寺に来れば帰りに素手で帰さないということをよく寺内の者に言いかせてあります。子供は特に機会を逃すな、何でも良いから菓子があればすぐに手に握らせるということ、子供への直接

無言の教化と言えないのではないでしょう。か  
今から考えれば江藤ご前様はまことに偉い  
お坊さまであつたと思つて仕方がありません  
。苦しい時代の善導寺であつたればこそ  
余計に深く思い出しは鋭いものがあります。

善導寺での三ヶ月を後に四月に仏大に編入  
させて頂き三ヶ年、主に浄土学を中心に深  
い哲理は判らずに学問の真似事を習ひ、苦  
しいけれども楽しく、腹も立つけれども辛  
抱強く、色々な方々に恩恵をいただき、ど  
うやら学生に活を追させていただき、まこ  
とに凡て如来のご本願の賜物と言われるよ  
うな先輩になつて来た次第です。在学中に  
はお蔭様で各属の人達と交流出来たことも  
今日生かされて在る一つの姿であります。  
各子供会、社会福祉関係の中の大姉運動  
の勉強、児童福祉関係、等にも一端をのぞ  
く程度でしたが夫々がやはり積りつもつて  
今日の私に多少なりとも影響していること  
が又有難いと思います。卒業後はそのまま  
郷里に帰り寺内の運営に殆んど精力を傾け  
るとに角浄土宗侶として恥じない生き方をと  
日々目指している状況でありますが、仲々  
人間業のことにて、満足には行きません。

其の中ふとした御縁で教職経験ということ  
も裏で動いたことと思つていますが、多少  
広い境内であつたのを利して「幼稚園」設  
立、今日迄通算二十五年の歴史を辿ること  
になつた次第であります。近時にはふとし  
た機縁で布教師会のお世話をさせていただ  
き、何事も宗門発展・進展の願ひを優先に  
と考え、多少布教道にも頭を突込む形状に  
なつてしまひつゝあります。併し考えてみ  
れば、やる時にやる、やれる時にやる、  
結果は誰一人判る筈がありませんがそのよ  
うな積極性、前向きな姿が今日の浄土宗門  
として欠けておる点がありはしないだろう  
か。誰かがその中にやつてくれるであらう  
、余り一人で動き廻るのは控えた方が良く  
という考え方が宗門の底辺に在るとすれば大  
変なことではなからうか。浄土自堕落はそ  
れはそのまま我々の心の中に住む低い自  
己の安逸ではなからうかと懸念しています。  
例えば子供の問題は子供のすきな者が色々  
やつておればいいのだという考え方がどこ  
かに在るとすればそのまま時代と共に取り  
残されるであらうと思う。信仰の問題も実  
は現状では一番困難な境目の時代に入つて

おるのではなからうか。つまり信心の後継  
ぎの問題であります。物質は限りあり、自  
然と変化をえげ遂には消え去つて行つてし  
まう。これ釈尊開口最初の諸行無常の原則  
で普通の真理である。現代は將に物質豊富  
、物本位の時代である。物質財産の後継ぎに  
なると現代人は血眼になり集まるが信仰の  
後継ぎということになると遠い未来のこと  
、現実には関係ないと思つて背中を向けてとり合  
わない。大事な中心を他にして低迷をつづ  
けての生活の狀態が將に現代の危機ではな  
からうかと思ひます。児童年に當り、物質財  
産の後継ぎより、私の、私の家の信仰の後  
継ぎが今後の大きな大切な問題として將來  
をになう児童の問題として考察を進めて見  
たいと思ひます。

### 一、仏教と福祉についての感想

近年人権運動の高なり、及び人口高齢化  
が言われるに従つて「福祉」ということが  
必ずどこかの頁に見られるごとく普及され  
てきた。福祉ということは子供及び老人な  
どの幸福をまもり育てていくために社会的  
に行なう活動、乃至その社会的活動の体系

を意味していると思います。子供について言えば、元来子供は特に生まれたばかりの乳児は社会的に全く弱い存在であったのだ。我国では明治維新直前まで「間引き」「口べらし」と称して公然と嬰兒殺しが行なわれていた。西洋でもギリシャやローマの神話や伝説に捨て子が度々登場することから

わかるように捨て子や嬰兒殺しは一つの風習として存在していたのである。そして子供は大人一般と違って権利の行使能力において極めて劣るというより殆んど無い。子供はやはりあく迄も第一義的には親の庇護の下にあり、その親の子供であつて社会の子供ではない。親の賢明な愛情を十分に受けて健やかに育った子供はどの時代にも大勢いる。問題は子供を専らこのように親の庇護の下においている時、親の身勝手や偏見によって幸せを失う子供の場合や庇護する親のいない子供の場合である。ともかく子供一般から言えば子供というものは生きる為に必ず保護を必要とする。生まれる意志なくして生まれてきて、親の身勝手から直ちに葬り去られたり棄てられたり、或は親の死亡によって庇護を得られなくなつ

て苦難の中を生きていく子供。そしてさらに決定的なことは、このような子供は大人一般と違って社会の中にいかに痛めつけられても社会に告発する能力を持ち合わせていない。まさに「無告」の存在である。子供はこの地球に生まれてくるのに親を選ぶということは出来ない。無限の意味に於て三界の授かりものと言うことである。無限の糸によつて結ばれている夫々の因縁の中から唯一の生命が与えられるのである。例え一つの小さな生命であつても此の世に生を受けた以上は皆夫々生きる権利を持っているという自覚に立つことです。仏教保育綱領の第一に慈心不殺、生命尊重の保育を行なおうとある。一切を生かし育てる大生命力、慈悲心によつて保育する。ひいては人も動植物も生命あるものもとより、時物も一切を生かして殺さない慈悲の心を持つ人に育て、この生命の根源である仏を信ずる人にまで保育するのである。皆平等に幸福でありたいと念願するのは人の心であり、仏教の心であります。然しここで注目したいのは「福祉」という言葉の持つ内在的価値についてである。福祉、福祉と近

年叫ばれつづけられ、やはり一つの反面が出ている点も見られるのではなからうか。所謂「福祉太り」という現象である。福祉の美名を逆に利用して自分等の立場をことさらに宣伝してゆくことである。これには又「マスコミ」との関連が出て参りますけれど注目して行きたいことであります。私は部屋の一隅に座右の銘として次の言葉を掲げてあります。「健康」「信頼」「寛容」「忍耐」「決断」の言葉です。人から頼まれば直ちに此の言葉を書いて差上げています。つまり自分で努力、忍耐することなくして都合のよい結果だけを期待するという考え方である。御都合主義のハンランが風潮している姿であります。これ等は凡ての社会面に於ても溢れています。教育面に於てもそうであります。子供を可愛がり過ぎる、老人に思いやり過ぎる傾向が無きにしもあらず。此の国際児童年に当り一つの警句として眺めたいと思います。結婚式の御祝儀に招待されて御挨拶を聞きましても、「此の人となら必ず幸福になれる、私だけを大事に愛して呉れる。幸福な結婚生活を送って下さい」という表現が殆んどであり

ます。一昔前の御挨拶ではそうでなかった。「此の人となら、どんな苦勞をもいとわな。苦勞、辛苦を共に泣いて行ける人として私は運びました」と御挨拶を聞いたものである。又葬式の弔辞でも「―永遠に静かにお眠り下さいませ」という言葉乍りである。このことはどう考えても特に浄土宗の教義とは凡そ全く反対ではなかるうかといつも思うのであります。還相回向とある如く、静かに眠るどころか、後につづく現存者へのお護りに目には見えない大きな力を働かすといただくではありませんまいか。どうしてもそのように思われてなりません。難かしい教義を持ち出す意はありませんが、夫々の一家庭の中に於ては親と子供の關係を考えねばならない点が多々あるようであります。

## 二、仏教信仰に根ざした家風の確立

戦後教育の中から宗教を骨抜きにした。つまり合掌もなければ、世の為、人の為、お蔭によって生かされておるといふ考え方が無くなってしまった。その結果が今日の社会に流布してしまつた感があります。核

家族化と言つては夫々が個別に在る考え方になつてしまつた。子供部屋でも個々に扉を閉め断絶の家型になつてしまつた。つまり家族の中でお互いに名前を呼び合うことがなくなつた。念仏の心が薄くなり無くなつてしまつた。お互いの不信がつつり、家庭事件、争ひ、自殺などが多くなり毎日の紙上を賑わしています。法然上人の御遺訓、一枚起請文の御言葉が身に刺すような氣持で仰がれるようであります。自分の家の信仰の確立、信心の後継ぎに暖かく家をとおり囲むところに子供の幸福が根ざしているように思えてなりません。信仰の雰囲気は家庭に確立することから私達の教化があるように思えます。この事は理論ではありません、教説でもありません。朝夕両親が合掌し、念仏唱え、お花を献げ、香を手向ける姿を子供に印象づけることから凡ては始まるように思えてなりません。子供には難かしい理論は判りません。所作動作、行動の中から、雰囲気の所生から大きく影響を与えてくるものと確信いたします。今日お寺に参詣する中年の両親方は必ず幼ない時、祖父母に手をひかれ、説教の雰囲気の中に

育ち、お寺様から「まん十」「お菓子」をよく頂いたという家庭から抵抗なく信仰の後継ぎが成り立つていくように思われます。裏を返せば信仰の雰囲気のない家庭は恵まれて生活は豊富でありましても永続きしないということをごに差しはさみたいと思います。現実だけが、永遠か最後の人生の勝利者はどちらになるか、日本の風土に先輩がたゆまず育成しつづつ来られた仏教風土の趣向を今ここに大切に育てたい氣持にかり立てられるようです。御先祖供養に心を向け、お墓まいり、法要への参加、仏行事への参加、協力和御両親が子供と共に在るような姿をと念願いたします。如來の本願と共に大きな無量の力によって生成され守護されている歡びに子供を位置づけたということであります。ささやかな私だけの願ひであります。

## 三、仏教行事と生涯教育

世の中は知れば知る程、判らない事ばかりであります。聖徳太子は「世間虚仮」とも言われた。判らないけれども知らず知らずの間に人間の感情が暖かく育てられて行

く方法も判らない世の中にあるものに仏教行事があります。お盆行事もその中に最もるものであります。ご縁の深い死者と現存者が一つに出会いはる行事で、忙しの中に御先祖様ということを考えさせてくれる、心ゆかしい行事であります。我が家の仏壇のお飾りも子供達への大きな教育の一環であります。何でもないのであります。すが子供達はだまって見つめています。やがて成人になって一家を構えた時その風習はそのままに受け継がれて参りましょう。言葉でない教育、素晴らしい仏教の味であります。八月もお盆の三日間が過ぎると下旬にお地藏様のお祭りが全国でも行われると思います。京都では地藏盆と言われて、各町内毎に片隅に祭られてある地藏様へお詣りし、様々な形で、童話を聞き、劇を見、合唱したり、お接待のお土産を頂き、胸で合掌し念仏唱えて珠数繰りをし一夜を過す行事でまことに心床しい、いつ迄も忘れることの出来ない子供の祭典であります。児童教化の一端として学生時代手伝いに行き、下手な童話に汗顔したことも楽しい思い出です。理論をこえた難かしい条件もない平

等の姿の行事であります。当北九州市小倉では、地藏盆を別名「線香山せんこうざん」と伝えられ、永い間培われてきた伝統が残されています。毎年八月二十四日夜にお地藏様の縁日に繰り広げられます。各寺院及びお地藏様の祭られてある町角に砂の山がこしらえられ、此の次はあそこのお地藏様じやと線香を沢山持つて廻り歩く姿であり、夏のかかすことの出来ない風物詩として伝々承々語り継がれてきています。誰言うともなく形作られてきた風習であることが有難いことです。

浴衣ゆかたに帯をしめ、散々伍々歌をうたい、盆踊りなどの裡に「線香山」は見る見る裡に香煙もうもうと子供達の顔を包んでしまします。子供の顔とお地藏様の顔が一つにとけ合う姿であります。様々な子供の願いをお地藏様はキツとかなえて呉れるものと子供達は信じきっているものと思われてなりません。「地藏」の名は母なる大地の如く、万物を平等に育成し成就せしめる偉大な力を蔵している事より起り、子授け、安産、子育て、田植え、水引き、身代り信仰の広がりも「大地の如く力を蔵する」ことに由来する。近年では水子供養の代表的仏様

にもなっています。いつ迄たっても忘れることの出来ない故郷の、幼時の純粋な夢の体験であり、誰でもが等しく持っている一生涯教育の出発点でもあります。同じく子供は幸福になれる権利を持っている姿に帰るものであります。近年水子供養が広がり、水子地藏建立がよく聞かれ、多くの参詣を得ている姿も子供に寄せる母親の切なる願いと救いの叫びのように思われます。生まれ来る子供の生を断ち切った愛着は殆んどどの婦人が体験していると言っても過言ではないでしょう。

地藏盆、線香山の行事が過ぎる頃、永い暑い夏の気候も終り、爽やかな秋の冷気が感じられるのも天地自然の糸乱れぬ不思議な運行の妙であり、それこそ如来の本願力そのものであります。「今日も子供達は歌い、踊り、語らい、明日の世界へ向って、それこそ無限の可能性を蔵しつつ未来へ飛び立たんとしています。」テレビ、ラジオで見聞する「ゴダイゴ」の歌う、子供讃歌を聞き乍ら、国際児童年としての本年の意義の一端を考えるのも私一人ではありますまい。「健やかに伸び伸びと育つ権利と義

務を持つべき子供の在り方」幸いにして愛すべき我国土として仏教の風土に永い間なじんできた立派な宝を今こそ辛抱強く子供達に展開させて行きたいものだと思うのであります。又暖かく包んで見守って行きたい願いでもある。

## 手の教育、心臓の教育

添田 翔

私のところの幼稚園で毎年実施している家庭訪問、クラス懇談会などで、一番たくさん出るお母さん方の意見や希望に、子供に「字を早く教えてほしい」「計算を早く教えてほしい」というのが、毎年強く出される。又園児でオルガン教室、ピアノの塾、絵画教室などに通っているものも相当数いる。こういう状況を見ると「幼稚園からではおそすぎる」という宣伝文句にとりつかれてしまっているのではないかと心配ではない気がする。私は幼児教育の専門家ではないが、真の幼児の福祉、教育の立場を

考えて幼児の教育にあたりたいとの熱意をもちつつきたい。

一、アランの幸福から

アランの「幸福論」の中に「祈り」の章があり、次のように言っている。

「口を開けたままイという音を考えることは決してできない。やってみるがいい。黙って考え、ただ想像したイが一種のアになることが確認されよう。この実例によって、想像力というものは、肉体の運動器官がそれに反対する運動を行なうときには、たいした動きはしないことがわかる。動作はこの関係を直接的な証拠から確かめる。動作はすべての想像された運動を実際に描き出すからだ。怒っていれば、わたしはまちがいにいくこぶしを握りしめる。これはだれでもよく知っている。ところが、人は一度に、そこからさまざまな情念を引き出すとうとしない。……」

二、ロダンの「考える人」、広隆寺の「思惟像」

ロダンの「考える人」は男性が深刻な考

えにふけっている姿を遺憾なく表現している傑作である。男性的な筋骨の美を表現しているというような美的な鑑賞に終る浅い見方では不十分であろう。広隆寺の「思惟像」は女性的なやわらかい美しい体つき、微笑をたたえた顔だち……といった、これも美的な鑑賞に終るのでなく、「考える人」といい、「思惟像」といい、共に「考える」ことを表現し得ているのは、どこをどう表現しているかの解釈をして始めてこの二つの像の傑作たる所以を把握し得たことになると考える。あらためて二つの像の全体を、そして部分の細にわたって観察して見たい。要点は曲げ得る関節を全部曲げている点である。ロダンの考える人は上体を前に深くたおし、思惟像は首を少し前にまげている手や足も、ロダンの像は足の指の一本一本にも力を入れて曲げている。私らはこれを通して考えることは頭で考えるのみでなく、身体全体が考える姿に入らなければならないこと、身体全体が頭で考える作用を後からささえてやらねばならないこと、このためには関節を曲げておかねばならないこと、簡単に言えば骨が考える姿にならねばなら